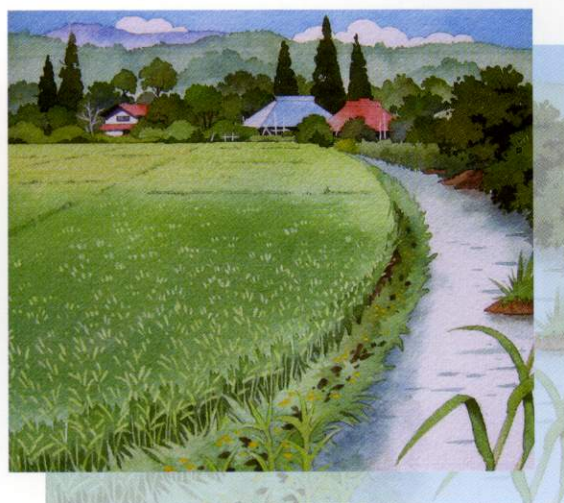


平成24年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 菅井 一良

今年も喜多方市の小学校農業科は、市内全小学校十七校、千九百九名で実施することができました。農業科の運営につきましては、地域の皆様、地元農業高校の皆様、各校教職員など、本当に多くの皆様のご支援とご協力をいただきながら、今年で六年目を迎えることができました。改めまして心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、この喜多方市における小学校農業科の取り組みが、第四十二回日本農業賞の特別部門「第九回食の架け橋賞」において最高賞である大賞を受賞いたしました。子ども達の成長に学校と地域が一体となって取り組んできたことが評価されたものであります。種まきから管理、収穫、加工、調理に至るまでの一連の農作業にこだわり、子ども達の心を農業で育てようとするのが教育、そして日本の未来に必要なであると認められたのだと自負しております。この受賞を契機に、さらなる充実に努め、子ども達の心を育て生きる力を育んでまいりたいと思います。

子ども達に必要な体験活動とは、生きる力とは何かと言うことについて、昨年十二月に世界的な生命科学者で

農業科の提唱者でもある、J・T生命誌研究館 館長 中村 桂子氏をお招きして基調講演をいただきました。その一節です。「農業をやっている子どもたちを見て、これが「生きる力」なんだと思いました。一つは、素敵な笑顔ができること。二つ目は、自分で考えて行動すること。三つ目は、コミュニケーション能力があること。」とおっしゃいました。こうした力が、これからの社会を生き抜く上で大きな意味を持つのではないかと実感しました。喜多方市の小学生が農業科の学習に取り組み続けることは、まさにこれらの力を身に付けることだと思いました。

喜多方市では、農業を通した体験活動に取り組み、子ども達一人ひとりに「生きる力」を培っています。そして、命を育てることで、私たちの胸を打つ「心の成長」も育んでいます。この作文集にはこれらの成果が一杯詰まっています。ぜひ、多くの皆様はこの作品集をお読みいただき、感動を共有できれば幸いです。

結びに、大変お忙しい中、ご寄稿いただきエールを送っていただきました帝京大学の野田知子先生、慎重に審査をしてくださった審査員の皆様、冊子の作成にご協力いただきました宮城学院女子大学の佐藤幸也先生と学生の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、小学校農業科の取り組みが日本全国に広がり、より良い日本の未来を拓く一助となることを願い発刊の言葉といたします。

農作物の生長に命を感じ、自らも成長する喜多方の子どもたち

帝京大学教育学部 教授 野田 知子



「小学生とは思えないくらい表現がすばらしかった。 “たいへんだけれど、それをやることの大切さが分かった” など、児童の言葉ひとつひとつに成長が見えた。」 「“育てるのはとても大変だったけど面白かった、楽しかった” といった子どもたちがとても多く、食や命の大切さを実感できる機会であると思った。また、“苦手だった野菜を食べられるようになった。” という子どもたちもいて、食の楽しさを知ることにも大いに期待できるのではないかと感じた」「学校だけでなく、地域の人々に支えられた教育だ。地域と一体になった学校だ」

これは、喜多方の小学生が書いた作文を読んだ東京の大学生の感想です。大学の教育学部で食教育・食育を学んでいる学生の中には、レストランや居酒屋、コンビニでアルバイトをしている学生

もいます。「食べ残しが多すぎる」「まだ食べられるものをいっぱい捨てている」現実に関心を痛め、「どのような教育をしたら、食べ物を無駄にしないで、感謝して食べる人を育てられるのだろう」という思いで、様々な食べものに関する課題や、農業や食料についての教育について学んでいる学生がいます。

その学生たちが、喜多方市立小学校で「農業科」の授業をうけた児童の作文を読むと、まず、驚きます。農作業の大変さや、作物が育っているようすに感動することなどが書かれているだけでなく、「食べ物は生き物だから、ありがたく感謝して食べなくてはいけない」「作業は大変だ。でも、大変だからわかることがある」など、現代の大人たちの多くが忘れてしまったような大事なことを、書いています。農作物の生長に命を感じ、自らも成長する喜多方の子どもたちのようすがわかります。「農業ってすごいなとあらためて強く思った」人、「農業の大変さを知った」「“きょう力”をしないといけないことを知った」人も多くいます。それらの言葉は実体験に基づいて自分で考えた言葉です。喜多方市小学校農業科の「目標」である、「なすことによって学ぶ」「自然の係わり合いの複雑さを理解し」「食べる事の意味を理解し、生命の大切さを理解出来るようにする」などが、

子どもたちの中に育っていることがわかります。学生たちの疑問に対する答えは「農業科」にありました。

平成十九年三月、新聞で喜多方市小学校で「農業科」を設置するということを知った私は、「やった！」と思いました。それまで、多くの農業体験学習の場を見てきた私は、多くの農業体験でおこなわれている「種まき・苗植えと収穫だけ」ではなく、「土を耕し、種をまき、日々の世話をし、収穫し、調理・加工して食べる」という一連の作業をすることでわかることが多いのではないかと感じていました。しかし、一連した農業体験を出来る条件のある学校は、なかなかありません。そんな思いでいた時に読んだ喜多方市小学校「農業科」の記事は、「やった！」だったのです。

喜多方の子どもの学びを支えているのは、子どものがんばり、先生方の努力、支援員や地域の人々の愛情あふれる支え、それらをまとめて企画・推進している喜多方市や教育委員会のみなさまのやり甲斐を感じてされている仕事などです。

喜多方の子どもたちは幸せです。そして、「作品集」などによる学びの発信は、全国の心ある人々に希望を与え励ましてくれそうです。ありがとうございます。

入
賞
作
品

目次

【大賞】

ジャガイモを育てた体験から

塩川小学校 四年 渡部 みちか 12

改めて思ったこと

松山小学校 六年 福島 諒華 15

米作りと命

豊川小学校 五年 針生 美琴 13

小学校最後の農業科

豊川小学校 六年 高橋 りほ 16

米作りの喜び

塩川小学校 五年 遠藤 大誠 14

【優秀賞】

えだ豆が育つ自然の力

第一小学校 三年 江花 葵 17

農業をして思ったこと

熱塩小学校 三年 菅井 日花里 17

楽しい農業科

慶徳小学校 四年 都倉 拓夢 18

農業の大変さ

豊川小学校 四年 大須賀 佑吏 19

命の大切さ

豊川小学校 四年 風間 大思 20

協力

第三小学校 五年 小檜山 怜奈 21

育つことは生きている証

山都小学校 五年 大塚 菜生 22

生活を支える農業

第一小学校 六年 風間 英恵 22

農業から学んだ命の大切さ

熱塩小学校 六年 菅井 日菜乃 23

愛情を大切に

駒形小学校 六年 塚原 直也 24

【農業科賞】

農業科の勉強をして									
第二小学校	三年	小澤	翔平	25					
とうふ作り									
松山小学校	三年	古佐原比可吏		26					
大切な大豆									
松山小学校	三年	庄司	孝太朗	26					
とてもおいしかったポップコーン									
上三宮小学校	三年	塩原	未夢	27					
さつまいもを育ててみて									
第三小学校	三年	福島	愛子	28					
はじめてのイネかり									
慶徳小学校	三年	夏井	啓伍	29					
大根作りで考えたこと									
堂島小学校	三年	福地	花奈子	30					
たいへんだった農業科									
姥堂小学校	三年	小関	茉依	31					
幸せの花									
第一小学校	四年	落合	勇斗	31					
ずっと見てきた小豆									
松山小学校	四年	佐藤	優希	32					
農業の大切さ									
熊倉小学校	四年	長谷川	優真	33					
農業科でがんばったこと									
熱塩小学校	四年	菊地	唯	34					
大切な野菜の命									
加納小学校	四年	山口	実莉	35					
自分たちで作ったえだ豆									
駒形小学校	四年	大原	綾乃	36					
農業大好き									
堂島小学校	四年	辰野	楓真	36					
初体験で学んだこと									
第一小学校	五年	山内	恵美	37					
ぼくが考えたこと									
関柴小学校	五年	渡邊	匠	38					
農業科について									
慶徳小学校	五年	齋藤	優斗	39					

お年寄りの笑顔を見れた赤はん配り

熱塩小学校 五年 遠藤 伶菜 40

「命」から命 そして笑顔へ

加納小学校 五年 長井 穂乃実 41

お米一つぶの大切さ

堂島小学校 五年 加藤 万結 41

農業科で学習した事としようらいの夢

姥堂小学校 五年 須藤 旭陽 42

心に残った農業

駒形小学校 五年 大堀 瑞希 43

カボチャの命をありがとう

山都小学校 五年 平井 理子 44

おいしい野菜づくりをめざして

高郷小学校 五年 横川 千亜希 45

農業の大切さについて

第一小学校 六年 佐藤 朱里 46

作物の命

上三宮小学校 六年 佐藤 靖乃 46

作物を上手に育てる時に大事なこと

姥堂小学校 六年 入岡 久瑠実 47

自分も成長できた農業科

姥堂小学校 六年 斎藤 流月 48

作物を育てるといふ難しさ。

姥堂小学校 六年 中川 陽菜 49

小さな芽から

駒形小学校 六年 友田 優子 50

農業の大切さ

駒形小学校 六年 小滝 樹奈 51

喜多方市農業科に寄せて

「いのちの教育のサイエンス

く小さないのちの無限の広がりと生態、農の暮らし」

宮城学院女子大学学芸学部教授 佐藤 幸也 52

編集後記

【大賞】

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

ジャガイモを育てた体験から

塩川小学校 四年 渡部 みちか

私たち四年生は、今年の総合の学習で、ジャガイモを育てることになりました。私は、このジャガイモ作りの体験から野菜作りの大変さやむずかしさを知りました。

一つ目は、種イモの植え方です。私の祖母は、農業をやっています。私は時々、祖母が野菜のなえを植えるところを見るのですが、とてもかん単そうに思っていました。でも実さいに種イモを植えた時、その植える深さやとなりとのはば、向きなど、細かいところまで教えてもらい、ただ植えればいいと思っていた私には、おどろきでした。野菜作りには、そうした細いところにまで注意をはらわなければならぬし、その野菜にあった育て方というものがある

んだと思いました。

二つ目は、ぎっ草とりです。私は、虫がきらいなのでとても困りました。ぎっ草の間に虫がいると大さわぎ。でも、自分が育てているジャガイモのためだと思い、がんばってぎっ草とりをしました。いいジャガイモを育てるためには必要なことを一生けん命やるのが大切だと思いました。

三つ目は、ジャガイモのほり方です。去年は、サツマイモほりをしたのですが、その時とは少しちがっていました。ジャガイモをきずつけないように周りの土からほりおこし、手で土をよけながらジャガイモをほり出していきました。

低いしせいで、ジャガイモをほり出すので、体がいたくなり大変でした。また、ジャガイモほりは、八月の暑い日で、あせをダラダラ流しての作業でした。

でも、大変なことばかりではありませんでした。土の中からいろんな形のジャガイモがほり出されたときは、みんな大かん声をあげ、喜びました。大きいのが小さいのをたくさん収かくすることができ、いままでの苦労がふつとんだようでした。自分がその作物のために力を注いだ分、ちゃんと結果として表れることが農業の楽しさだと思いました。また、楽しさが味わえるようがんばりたいです。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

米作りと命

豊川小学校 五年 針生 美琴

米作り。それは、私が思っていた以上に大変で、楽しい活動でした。

小さな種もみから、芽が出ている。何だか不思議な感じでした。かれているようなもみから芽が出ているのです。これからお米になるであろう命がそこにあるのです。私はうれしくなりました。田植えの時は、水をはって、「ぐちゃっ」とした田の中に素足で入りました。転んでどろがついたこともあったけど、二、三本ずつの苗を手で植えていくのはとても楽しいものでした。少し大きくなった命を豊かな土と水の中へ「お願いね」と手渡すような作業でした。九月。稲かりが行われました。春には赤ちゃんだった種もみから、新しい命がたくさん生まれているのです。力を入

れて、かまで稲かりをしました。脱こくの時、一つ一つの小さな、大切な命を落としてはいけないと、大切に運び干しました。その後、乾そうやもみすりなどをして、やっと白いお米に出会えました。うれしいと思いました。白いお米が食べられることにとても感謝しました。

私達は、お米から命をもらっています。お米だけでなく、育てられたものを口にするというのは、命をもらって自分の命をつないでいるのだと思います。だから私の手足は、私だけのものではなく、お米や野菜からいただいた命であり、それらを変な思いをして育ててくださった農業をしている方々からいただいたものなのだというのを、改めて感じました。命をもらう事は当たり前ではないのです。感謝しながら、他の命をもらわなければいけないと強く感じました。また、他の命からできている私の命、友達の命。決してそまつにできないと思いました。

命をつなぐ。米作りから学んだ大切なことを周囲の人に伝えていきたいと思います。また、しっかり命をつなぐために、私自身さらに米について学び、米からいただいた命をつないでいこうと思います。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

米作りの喜び

塩川小学校 五年 遠藤 大誠

「今年もじいちゃんの新米ができたぞ。」

と言いながらお父さんが帰ってきた。熱塩のじいちゃんは、まだ、米作りをがんばっている。田植えや稲刈りにはお父さんが手伝いに行くけれども、その他は一人でやっている。ぼく達は、今年、米作りの学習をした。大変なこともたくさんあったけれども、その反対に楽しかったことや楽しみだったこともたくさんあった。初めて米作りをしてみて、じいちゃんが今でも米作りをしているわけが少し分かったような気がする。

田植えや稲刈りは手作業でやった。田植えのどろの感触も気持ちよかったし、みんなでやるとあつという間に終わって、とても楽しくできた。稲刈りはかまで刈った。刈る

のは簡単だったが、結ぶのはなかなかむずかしくてひもでやつと結んだ。農業の先生方は稲で上手に結んでいたのんびつくりした。収穫までに苗の生長の観察にも行った。自分が植えた苗がどんどん大きくなっていく様子を見るのは、とてもうれしかった。農業の先生が、「自分の子どもと同じように大事に育てる」と話していたのを思い出した。じいちゃんも苗の生長の様子を見ながら喜んだり、心配したりしているんだろうなあと思った。

脱穀は、足踏み脱穀機とせんばこきでやった。一台ずつしかないので牛乳パックも使った。もみが何袋も取れた。じいちゃんが、

「収穫が一年の中で一番うれしいもんだ。」

と話していたとおり、手作業での脱穀は大変だったけれども、終わった後は充実感でいっぱいだった。

それから、農業の先生や担任の先生にもみすりや精米をしてもらって、ご飯を炊いて食べた。おいしくておいしくて何杯も食べた。三合だけおみやげにもらって帰った。お父さんもお母さんも弟たちもおいしいおいしいと言って食べてくれた。みんなの顔は笑顔でいっぱいだった。じいちゃんは、きつとこの笑顔のために今でもがんばっているんだなあ。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

改めて思ったこと

松山小学校 六年 福島 諒華

私達六年生は、農業科で里いもを育てています。私は、それまで里いものがあまり分かりませんでした。それで家で里いものを調べてみました。里いもの育て方は、夏にかんそうしにくい場所を選び、たい肥とかせい肥料を土にまぜこみます。みぞをほってたねいもをならべます。その後、土をかけてたつぷりと水やりをします。八月ごろまで、月に一回、かせい肥料をやり、かぶもとに土をよせてわらをします。子いもの芽がのびはじめたら、わらを取りのぞき、芽をうめるように土をかけます。そして、育ったら、しゅうかくです。私は、このことを知っていればだいじょうぶかなあと思っていました。ところが、今年の作物はうまく実りませんでした。私は、（何がいけなかつ

たのだろう）と、いろいろ考えました。でも、けつきよく失敗した原因が分かりませんでした。

私は今回の農業科で二つ改めて、思ったことがあります。一つ目は、農業はとっても大変でとっても難しいということです。農業は自分の育て方があっても、気候が悪かったらうまく実らないかもしれないし、ぎやくに、自分の育て方がちがえば実らないし、農業は気候との関係も難しいので、大変なのだと思います。もう一つは、食事です。私はよく、「いただきます。ごちそうさま。」などのあいさつを忘れたり、おなががいっぱいで残したり、きらいな物を残したりしてしまいます。それは、だめなことなのだと言うことが分かりました。私がこう考えることができたのは、今回の農業科でうまくいかなかったからです。うまくいかなかったことで農業の大変さも分かったからこそ、このことも深く考えることができたのだと思いました。

私は、農業が好きです。なぜなら、農業科は作物を作る楽しさだけでなく、食べ物大切さも考えたりできるので私は好きです。そして、最後の農業科で、こういう大切なことに気付くことができて本当に良かったです。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

小学校最後の農業科

豊川小学校 六年 高橋 りほ

金色の稲穂がきらきらと、田んぼいっぱいに実りました。いよいよ今日は稲刈りの日です。「みんなで一生けん命育てた稲は、おいしく育っているのかな。」「早くお米にして食べたいな。」と、わくわくしながら今日まで稲を見守りながら育ててきました。

今年は、稲をバインダーで刈るだけではなく、かまを使い、人の手で刈ることに挑戦できました。かまでの稲刈りは、初めてでしたが、指を切らないように、稲を落とさないように注意しながら刈ることができました。とても大変な作業だったけれど、かまで稲を切っていくことは楽しいことだと感じました。他にも、稲を束ねて結び、半分に分けてから棒にかける「さでがけ」にも挑戦しました。稲

を棒にかけてかわかすと、味がまるやかになるということでした。この作業をやりながら気付いたことは、稲の成長のすばらしさです。始めは小さな種もみだった稲がぐんぐん生長して、今はもう弟の身長と同じ位の背の高さになっています。そして、また新しい種を子孫に残して枯れていく。短い一生ですが、そのくり返しが弥生時代からずっととぎれることなく現在まで続いています。「お米は日本人には欠かせない大切な食べ物なんだな。」と感じました。

さらに自然の豊かさに気付く機会にもなりました。田植えの時は田んぼにかわいいおたまじやくしがたくさん見られ、そばを流れる川にはハヤが群れを作って泳いでいました。他にも田んぼにはカエルやザリガニ、アメンボなどたくさん生き物がいました。そよそよと五月の風になびく、田んぼにきれいに並んだ緑の苗と、生き物がたくさん住んでいる水田。毎日、学校の登下校で見ている風景がとてもすばらしいものに感じられました。

私は、これまで引き継がれて来た稲作と豊かな自然を当たり前のように思ってきたけれど、農作業を通して、手間をかけても大切にしている価値があることに気付くことができました。

【優秀賞】

えだ豆が育つ自然の力

第一小学校 三年 江花 葵

わたしたちは、農業科の学習で大豆を植えました。さいしょに大豆を植えた時は、この大豆、どんなふうにあだ豆に育つのかなあーと思っていました。だからと言って、えだ豆が育つまで、ずっとその場にいることはできないので、インターネットや辞書を使って、えだ豆の育ち方を調べることにしました。

まず、えだ豆になるためにひつようなのは、太陽の光です。なぜ、太陽の光がひつようかという、えだ豆に水だけをやってい、えだ豆がしめったりくさったりしてしまいますが、太陽の光が当たると、水をえだ豆にかけても、太陽の光が、かけた水をかんそうさせてくれるからです。えだ豆がくさらずに、ぐんぐん育つには、太陽の光がひつようであるということがよく分かりました。

次に、ひつようなのは、きれいな水です。なぜ、きれいな水がひつようかという、えだ豆に太陽の光だけが当たっていると、えだ豆がかんそうしてしまい、えだ豆の実が、

一番さいしょに植えたようなかたい大豆になってしま、からです。だから、きれいな水をえだ豆にかけてあ、ることがひつようだということが分かりました。

さらに、その太陽の光ときれいな水がバランスよくあ、えられることが大切だということも分かりました。今年の夏は、とてもあつく、雨が少なかった、えだ豆にとつては、バランスがよくなかったこと、になります。

このように、えだ豆が育つ、た、くさんの自然の力が、か、わ、っています。この体験活動を通して、あらためて、自然の力は、すごいなあー、と思いました。

これからは、自然の力で育つた食べ物に、感、し、や、の、気、持、ち、をもち、大切に食べていこう、と思います。

農業をして思、った、こと

熱塩小学校 三年 菅井 日花里

わたしたちの学校では、た、く、さん、の、作物を、育、て、て、い、ま、す。カブ、大根、ニンジン、大豆など、ほ、か、に、も、い、ろ、い、ろ、な、作物を、育、て、て、い、ま、す。なかでも、育、て、る、の、が、たい、へ、ん、な、の、は、お、米、です。

毎年五月になるとみんなどろだらけになりながら苗を植えます。九月になると、いねかりが始まります。いねかりにはそれぞれ役わりがあります。一・二年生はいねをはこぶ仕事、三・四年生はいねをむすぶ仕事、五・六年生はいねをかる仕事です。わたしは、いねをむすぶ係でした。いねをむすぶ仕事はたいへん力がいらします。わたしは、手がいたくなるほど力をいれてむすんだので手ぶくろをはずしてみると少しはれていました。「これは、がんばったしゅうこなのかな。」と思いました。みんなでいっしょうけんめいがんばったので予定より早く終わりました。ほしてあるお米を見ていたら「しゅうかくさいが楽しみな。」と思いました。

十一月になりいよいよ学習発表会、しゅうかく祭になりました。みんなおもちをついていたり、見ていたりしていました。おもちを食べる時がきました。わたしは、一口食べたしゅんかんにとてもおいしいと感じました。みんなで育てたお米だと思うとなんだかうれしいような気がしました。そして、今年、熱塩小で育てたお米は金しようをとりました。わたしはそのことを聞いた時、とてもほこらしい気持ちになりました。

わたしの家は農家です。毎日お父さん、ばあちゃん、じ

いちゃん、ときにはお母さんたちが協力して野菜、果物、たばこの葉などを育てています。わたしもときどき手伝いをしますが、すぐにつかれてしまいます。こんなつかれる仕事をずっと続けているなんてすごいと思います。わたしもこれからは、お父さん、お母さん、ばあちゃん、じいちゃんの手伝いをもっとしたいです。それからお父さんたちにかんしやしたいです。

楽しい農業科

慶徳小学校 四年 都倉 拓夢

「農業は、てきとうにやると、おいしくならない。一つ一つ心をこめてやるのがたいせつだぞ。」

ぼくがおじいちゃんから言われた言葉です。

ぼくの家では、毎年アスパラを作って出荷しているので、ぼくも休みの日には手伝うことがあります。そんな時にぼくは、おじいちゃんから、ていねいに作業するように教えられました。

ぼくは、その言葉通り、農業科の学習でも一つ一つていねいに作業してきました。でもいくらていねいにやったか

らといっても、野菜が大きく育つというわけではありません。雨や風などで弱ってしまう野菜もあります。

今年は、ジャガイモ、大豆、米を育ててしゅうかくしましたが、中には、くさっているジャガイモもあったし、大豆も虫に食われたり、変色したりしているものもありました。米もその年の気温によってとれる量がうそです。自然の力というのは、大きいんだなあ、と思います。でも、ぼく達は、自然の力に負けていけないのです。

ぼくは、農業科の学習が好きです。いろいろな野菜をしゅうかくして、みんなといっしょに喜び合えるし、支援員のみなさんから農業のことについてくわしく教えてもらえるからです。それに、この間の食育教室では、ぼく達の育てた野菜が全て、健康な体のために大切な働きをしていることが分かったからです。

じょうぶで健康な体をつくるためには、

「ま・ご・わ・や・さ・し・い・こ」

が大事だと教えてもらいました。「豆・ごま・わかめ・野菜・魚・しいたけ・いも・米」のことです。今年ぼく達が育てた三つの食べ物が全部入っていたのです。

農業は大変なこともあるけれど、ぼくは、家の手伝いも農業科の学習も、ていねいに楽しくやっていたと思います。

ます。これからも農業を続けていきます。

農業の大変さ

豊川小学校 四年 大須賀 佑吏

ぼくは、農業科の学習で、農業の大変さを知りました。特に、草むしりなどは、むしってもむしっても生えてきて、農業をやっている人は、とても大変だと思いました。

他にも、マルチがけや水やりも大変だと思います。毎日毎日、水をやったり、とてもつかれる仕事ですが、野菜のためにはがんばっていて、りっぱな野菜が出来るととてもうれしくなります。マルチがけも体験しましたが、マルチがけは、一人ではとても出来る事ではありません。ぼくも友達といっしょに長いマルチをかけました。マルチは、思ったより重くてびびりました。マルチがけを体験して、初めて農業では「きょう力」をしないといけないことを知りました。育てた野菜は、「大根」「白菜」「ニンジン」「ジャガイモ」です。「ジャガイモ」は、「たねイモ」を土の中に入れ、「大根」は、赤い色のたねから育っていました。ぼくが不思議だと思ったのは、「大根」です。なぜ、赤い色

のたねから、真っ白の大根が出来るのか調べてみたいのです。野菜が大きくなってしゅうかくの時には、大きくりっぱな野菜がとれて、とてもうれしい気持ちになりました。しゅうかく祭では、「とんじる」を作って食べました。ニンジンや大根、ジャガイモを切ってみると、やわらかく、中がぎつしりとつまっていました。それからまたにすることで、白菜も大根もニンジンもジャガイモも、もともともとやわらかく、おいしくなり、食べてみると、いっしょうけんめに作ってよかったと思いました。

農業をやっている人たちの、つらいことがあってもがんばっている気持ちが、野菜を育ててみて、よくわかったような気がします。マルチがけ、水やり―毎日毎日水をくんで重たいじょうろを運ぶ、草むしり―ぬいてもぬいてもたくさん生えてくる。こういうつらいことがあってもおいしい野菜を作るため、農家の人はがんばっていることが分かりました。

命の大切さ

豊川小学校 四年 風間 大思

ぼくは、何もしていないわけではないけれど、たねやた

ねいもからあの大きい野菜が出来るのはなぜかと思いました。たねいもからは、少し芽は出ていたけれど、それからどうやってたねいものいもが無くなり、小さい芽がどのようにに大きくなり、どうやってじゃがいもの実がなったかは分からないです。でも、作物だって生きているから、大きく育って実がなるのだから、ぼくは、作物もそうだけれど他の物にも前よりもさらに感じやの気持ちをこめていただきますと言いたいです。人参、大根、じゃがいもは、生きているので、気持ちも持っていると思います。その他のものもそうです。白菜、かぼちゃなどの作物は、しゅうかくされ、料理されて食べられるのは、作物にとっては死という事なので、こわくないのかと思います。

でも、ぼくは、食べられるのは野菜にとっては、うれしいことだと思います。野菜は、しゅうかくされないでほうっておいても、いずれはかれて死んでしまうので、人を喜ばせて食べられた方が野菜はうれしいと思いました。

野菜という命を育てるのは、野菜だけではなく、農家の方一人一人のがんばったせいか野菜の品しつにかかわり、機械なんかより必ずおいしくなるので、野菜もそのほうが人をより喜ばせられて、うれしいと思います。

野菜は、一年よりも短く、人間よりもすごく短い命です

が、それぞれの命に人間に大切なえいようがたくさん入っていて、生物に大切な物がたくさん入って生まれてきて、生物を喜ばせるのが野菜だと思いました。

そして、野菜は、人よりは短い命ですが、生きようとす
る力で、根をはり、花をさかせ、そして、実を結ぶと思
いました。

協力

第三小学校 五年 小檜山 怜奈

わたしたち五年生は、小さな芽からお米になるまで田んぼに行って育て、米の生長や協力という事を学びました。わたしたちは、お米を育てる事だけを学んだわけではなく、わたしたちの仲間で協力し合い成長できたところもありました。お米を育て自分が変わったと自分でも分かりました。その理由は二つあります。

一つは協力です。わたしたちは、女子と男子でわかれる事が多くありました。けれど、お米に実ができ、かる時期の事です。重い稲を女子だけの力で持つのがむずかしかった時、男子が力をかしてくれてこれが協力だと思いました。

いつも女子と男子でわかれて作業などする時、男子が力をかしてくれました。その時、仲間だと思いました。二つ目は、小さな種から記録をとっていった事です。細かく見ることはできませんでしたが、少し見ない間に大きく育っているのんびりすることが多かったです。また、パソコンや本などでくわしく調べ、取らないといけない雑草や水のあげ方など田んぼに行かなくても調べる事ができました。実際に見たり、パソコンや本などで調べることで、お米ができるまでのひみつがよく分かりました。

これらの体験をして、わたしたち五年生は成長し、仲間で協力し合うという事ができるようになりました。そしてお米ができるまで観察をしてじゅんかんがた農業を知り、わたしたちが食べている物は命がつながり合っていていくる物だと思いました。そして、一人一人の心がそろって自然と協力ができるものだとなりました。わたしはお米を大切に育てる事でこんなに自分が変わると思いませんでした。

育つことは生きている証

山都小学校 五年 大塚 菜生

農業科。私は今年この農業科で、大根を育てました。とても小さな種からどんどん成長し、しゅうかくした時の大きな喜びは忘れられません。

種は十月の中ごろ、畑にまきました。私は大根の種を初めて見たので、

「えっ。こんな小さな種から本当に大きな大根になるの。」

と思いました。種は二、三ミリくらいしかなくて、落としたら土と一緒になくなってしまいそうでした。こんなに小さな種だったので、私には不安もありました。

「芽が出たときに強い風や雨がふったら、大丈夫かな。」

でも、そんな不安とはうらはらに、大根の種は芽を出し、ぐんぐん成長していきました。畑に行くたび大きくなって、地面から出ている葉は青々としていて、私には、大根が生きて生きているように見えました。私自身、あんな不安はもうなく、

「はやくしゅうかくしたい。」

と思うようになっていました。きっと他の友達も、そう思

っていたはずです。

しゅうかくの日、畑へ行ってみた私は、とてもおどろきました。葉で土が見えないほど、たくさんの大根が育っていたのです。ぬいてみて、さらにおどろきました。とても大きくりっぱな大根だったからです。そのしゅんかん、私は、大根って生きてると、感じました。

私は、農業科が始まって三年目にして、学んだことがありました。それは、「野菜は生きている」ということです。それまでは、しゅうかくした野菜を見ても、そんなことはあまり感じませんでした。けれど、大根の成長ぶりにはおどろき、「生きている」と感じ、感動できたことも、農業で学んだことのひとつだと思っています。

小さな種が芽を出し、育ち、大きくなってしゅうかくした大根。育つことは生きている証だと、私は考えています。

生活を支える農業

第一小学校 六年 風間 英恵

「また、去年と同じことやるのかあ。」

田植えをする時に、私はそう思った。米の種類はちがって

も、田植えのやり方は同じだ。正直、いやだった。田植えだけじゃなく稲かりもだ。本当にいやだ。つかれるし、大変だし。そう思っていた。

私の家の米は、父の知り合いの人が作っている米だ。その米を毎朝食べている。家の米がなくなりそうな時、私は思った。「米って大切だなあ」と。私達の主食を支えてくれる。私達の生活を支えてくれる。そう、これが米の役割だ。米だけじゃない。農業だって、大切だ。農業がなかったら、食事が出来ない。私は、気付かなかった。農業は、私だけじゃなく「みんなが生活する上でとても大切な、産業だ」ということを。

そんな、とても大切な産業でも困っていることがある。それは、米作りをふくめ、農業をやっている人は、高れい者が多いことだ。私達が習った支援員の方々の多くも、高れい者だった。今は昔とちがい、手作業じゃない。だからといって、つかれないわけでもない。農業は、種をまいたら作物ができるまで、管理しないといけない。けっこう大変だ。農業は、大切で大変。そういう産業なのだ。

「食べ物を粗末にしない」これは、当たり前のことだ。農業は大切・大変な産業。大切だから、粗末にしない。大変だから、粗末にしない。どっちにしろ粗末にしない。当

たり前のことで大切なこと。これを、私は今まで守ってきた。だから引き続き「食べ物を粗末にしない」ということを、守っていききたい。農業をやっている人達のためにも。

農業から学んだ命の大切さ

熱塩小学校 六年 菅井 日菜乃

「農業ってすごいな。」

学校で行われた収穫祭のとき、私は思いました。

私たちの学校の収穫祭は、一から六年生が育てた野菜や米を収穫し、みんなで収穫の喜びを分かち合う祭りです。収穫祭で食べたもののほとんどが学校で育てた米や野菜です。みんなでついたもちは、学校でとれた「もち米」で作りました。もちにかけるあんこも、五年生が育てた「小豆」から作りしました。

「いただきます。」

と、みんなで命に感謝して食べ始めました。私は、食べているときに、

「すごいなあ。このもちやあんこは全部、この学校で、私たちが育てたものなんだ。」

と達成感があり、嬉しく思いました。

私は「農業」は「命を育てる仕事」だと思います。なぜかというと、農業で育てている野菜などはみんな生きていて、命があるからです。私たち人間は、その命をもらって生きています。その命は、農家の方が育てています。もし、農家の方がいなくなったら、野菜はないし、私たちも野菜を食べることはできません。農業がなくなったら私たちは困ってしまいます。

「人とつながり、命を育てる。」

農家の方は野菜を育てることによって、消費者の方たちとつながることができます。農業というものは本当にすごいものだと思います。

しかし農業は、土や汗でよごれたり、朝早くから夜まで、暑い日も、寒い日も作業をしたりと、大変なことがたくさんあります。私の家も農家です。でも私は、汗まみれになつて朝早くから仕事をしている家族の姿が、かっこいいと思います。土や汗できたなくなっても、収穫したときには、自分で育てたという「達成感」があります。私は、命を育てる達成感のある楽しい仕事、「農業」の大切さを一人でも多くの人が分かってもらえるように願いながら、毎日の「命」に感謝したいです。

愛情を大切に

駒形小学校 六年 塚原 直也

ぼくの家は農家です。おじいちゃんは、毎日毎日、畑仕事や田んぼ仕事を行っています。ぼくは、田植えや稲刈り、収かくしか手伝った事がないので、そこまでの苦労や、手間を考えた事はありませんでした。でも、農業科の授業で、農業の大変さや、手間、苦労を実感することができました。なぜならば、一年生のために、ぼく達六年生は、準備や、片付けなどの作業を行っていたからです。学校の畑の、サツマイモを収かくする時、ぼく達は、その前の日に、畑の草を刈ったり、サツマイモの位置が分かりやすいように、じやまなツルを刈ったり、たくさん作業を行いました。

このようなことを行ったことで、ぼくの知らないところで、おじいちゃんは、手間ひまかけて、農業を行っていたことを知ることができました。また、大変さなども実感できました。

最近、機械ばかり使っていますが、ぼくは、手作りが一番だと思います。それは、愛情がこもっているからです。品質なんて関係ありません。やはり愛情が一番なのです。ぼくは、駒形小学校で行った農業科で、そう気付かされま

した。

「自分で作った米は最高にうまい！」

自分達で作った米には、作った人にしか分からない、うまみ、ぬくもりがありました。ぼくの家は、機械でやっていきますが同じようなうまみ、ぬくもりがありました。これは、同じような愛情がこもっているからなのでしょう。

「愛情をこめて育てんだぞ。」

おじいちゃんはいつもそう言っていました。やっぱり、愛情をこめて、手間ひまかけて育てるって大切ななあ。ぼくはつくづく、そう感じています。

【農業科賞】

農業科の勉強をして

第二小学校 三年 小澤 翔平

ぼくは、そうごうの時に野菜をそだてました。

ぼくは、じやがいものなえとえだ豆のたねを植えました。ぼくのいとこは、畑でくだものや野菜をそだてているのでそだてたことがあるけど、種からそだてるのは、はじめて

です。

まだなえを植えた時は、「これからちゃんとそだつかな。」という気持ちでした。だけどかんさつしていくと、ちゃんとそだったのでよかったです。どんどん大きくなっていき、友だちが植えたきゅうりやトマトも実をつけてくれました。しかし、トマトが赤くなってしゅうかくできると思いましたが、朝早くカラスがおいしそうなトマトを食べてしまい、なかなかしゅうかくできなかつたけど、先生がつり糸をつけてくれて、カラスはこなくなったのか、トマトが食べられるようになりました。毎日ちよつとずつしゅうかくして家にもちかえて食べました。ぼくは、サラダにして、おいしく食べました。

じやがいもは学校でサラダパーティーをしました。サラダを作るのは、たいへんだつたけど、おしくできました。

ぼくは、このべん強で野菜をそだてるには、時間もかかるし、いろいろなトラブルがあることがわかりました。野菜をそだてるのはたいへんだけど、来年は、もっとそだてるのがむずかしいけれどおいしい野菜と、あとイチゴなどのくだものをつくって、いろんな、りょうりをつくりたいです。野菜をつくるのはたいへんだと思います。

とうふ作り

松山小学校 三年 古佐原 比可吏

総合のべん強で、とうふ作りをすることになりました。

まず、材りょうの大豆を育てることからはじめました。畑に赤くそめた大豆を植えました。なぜ赤くそまっていたのかふしぎでした。

「それは、鳥に食べられないようにくふうしてあるんだよ。」

と、いっしょにお手つだいしてくれた畑の先生が教えてくれました。わたしは、実がなるのか心配だったけど安心しました。そして早く大きくなれないかなと思いました。それからどんどん大きくなって、秋には、大きな実がたくさんとれました。

いよいよ、みんなでグループにわかれてとうふ作りをすることになりました。でも、こまったことがありました。

それは、わたしは、とうふが大きらいなことです。とうふは味もないし食べたときの感じがきらいからです。だから、作るのは、楽しみだけど、食べるのはいやな気持ちでした。

まず、一ばん水につけた大豆をミキサーに入れて水を入

れてまぜます。それをなべに入れて九十度まであげます。次にふきんでこしておからと豆乳にわけます。豆乳にがりを入れてかためたらとうふのかんせいです。

できたとうふは、ビックで、すぐうれしかったです。でも、食べるのがふあんでした。一口食べてみるといつものとうふとは、ちがっていてあまくてプリンみたいにプリプリしていました。とってもおいしくてたまらなくて、いつもこんなとうふにしてほしいと思いました。

とうふ作りをしてみて、おいしいとうふを作るには、半年もかけて大豆を作ってとうふになることを知りました。また、大豆を育てるには、草むしりや水やりなど大へんなことがいろいろあることがよくわかりました。

農家をしている人たちは、くふうをして作っていることが分かり、大切に食べたいと思いました。

大切な大豆

松山小学校 三年 庄司 孝太朗

ぼくは、総合の時間に大豆を植えて育ててきました。夏になるころ、はじめて大豆のたねを見ました。ふつうの豆

と同じだなあと思つて、畑に大豆を植えました。その後みんなで草むしりや水やりをしました。とても暑くて大へんでした。ぼくの家でもお米や野さいを作っています。草かりのときにお父さんはあせをびっしりになります。大へんだけど、がい虫から野さいやお米を守るために、草むしりや草かりは大切な仕事だと聞きました。学校の畑の大豆の世話もしつかりやろうと思ひました。

秋になつて、大豆の実がたくさん実つてきました。みんな大豆のくきを根元からぬいてプールのそばでかんそうするように、大豆を根っこごとならべました。その後、袋に入れてたたいて、実が出るようにしました。ぼくの家でもおばあちゃんが同じような仕事をして、毎年豆をしゅうかくしています。よく実つた大豆と、虫に食べられて悪くなつた大豆を分けて、形の悪い大豆はたいひわくに持つて行きました。ぼくは虫に食べられた大豆を食事のときに見たことがあります。家では、おばあちゃんが一つ一つ見て分けてくれていたんだなと思ひました。

さい後にみんなで大豆を使った豆ふを作りました。大豆をすりつぶしてしぼつた豆乳とにがりをまぜて、真っ白な豆ふができました。国語の教科書で「すがたをかえる大豆」という学習をしました。大豆はとてもえいようがあつ

て、いろいろな食べ方があることを知りました。小さな大豆の種を育ててみて、食べる物を作ることは大へんだけど、おもしろいことだなあと思ひました。一つの大豆の種から、三十こぐらいの大豆の実がとれると、おばあちゃんから聞きました。一つのたねの力はとても大きなあとと思ひました。ぼくもたくさんえいようをとつて、勉強や運動をがんばりたいです。もっといろんな植物のことも育てたり、調べてみたいしたいです。

とてもおいしかつたポップコーン

上三宮小学校 三年 塩原 未夢

わたしは、とうもろこしのたねをまきました。初めは、とうもろこしのたねを植える時に、「とうもろこしって、どんな風になるのかな。」と思ひました。どうして、こう思つたかというと、一年生の時も、さいしよに、見た時に、「とうもろこしって、かわいいな。」と思つたからです。

あなをあけた所に三つ四つぶずつ植えました。土をかぶせたら、やさしく、トントントント、たたきました。たた

き終わったら、じょうろで、水をくれました。私は、みんながいないうちに、こっそりと、

「大きくなあれ。大きくなあれ。」

と言いました。そして、いっぱい水をくれました。夏に入ると、草が、いっぱい生えて、たいへんでした。毎回水くれば番になると、

「大きくなあれ。大きくなあれ。」

と言いました。

ついに、しゅうかくの日がやって来ました。大きな実に、長い毛、本当に大きくなりました。さいごに、とる前に、

「大きくなってくれてありがとう。」

と言いました。

次に、とうもろこしをかわかして、実をほぐしました。たまに、虫が、食べたところもあったけど、実をほぐしてから、おいしそうでした。

ついに、お料理を作る日が来ました。じゅぎょうさんかんの日にやりました。三年生は、全員で、八人なので、一人は、四人ずつで、作りました。私のはんは、一ぱんでした。私たちのグループは、ココアシュガーと、塩を作りました。みんな、四人で、交たい、交たいで、協力しながら、ポップコーンを作りました。味見をしようとしたら、手を

ちよつとだけ、やけどしました。でも、すぐ、なおりました。そのとき大人の人もいたので、安心しました。ポップコーンを食べたら、ほっぺがおちるほど、おいしかったです。楽しかったので、また、ポップコーンを作りたいです。

さつまいを育ててみて

第三小学校 三年 福島 愛子

わたしは、農業科でさつまいを育てました。

六月にさつまいのなえを植えました。その時わたしは「いつでるのかなあ。」ということで頭がいっぱいでした。

水やりの時も「まだでない、まだでない」と心の中でつぶやいていました。でもそのうち水やりをやっているうちにどんどんなえが大きくなってきました。それをみていたらわたしはとってもうれしくなって、とびはねたいくらいでした。

草むしりの時わたしは、いっぱいむしりました。その時わたしはさつまいもがわらっているように見えました。それを見たわたしもとってもうれしかったです。

そして九月にしゅうかくをしました。わたしはさつまい

もをきずつけないようにほりました。あんまりできていないと思ってほって見たら、とつてもいっぱいのさつまいもができていました。思わず「わぁ」と言ってしまうました。そのときわたしはとつてもうれしかったです。

しゅうかくさいで、さつまいもをやきいもにして食べました。ほつぺたがおちそうなくらいおいしかったです。さつまいもを食べたみんなもうれしそうです。

わたしはさつまいもを育ててみて楽しい思い出ができました。さつまいもがちゃんとできてよかったです。さつまいもを育ててみて、どういうふうに育っていくかとかいろいろ知ることができました。

はじめてのイネかり

慶徳小学校 三年 夏井 啓伍

「ザカザカ、グチャグチャ。」

と田んぼに足をふみ入れ、イネをかまでかる音が聞こえます。

「今日は、イネかりか。」

ぼくは、イネかりがはじめてなので、「大じょうぶかな。」

うまくできるかな。」とっていました。ぼくは、「大じょうぶうまくできる。それに、ぼくたちがたねをまいたんだ。がんばろう。」と思います。

そして、ぼくの出番が来ました。「大じょうぶ、さつき決めたばかりなんだ。」と田んぼに足をふみ入れました。さいしよは、イネをかるのがむずかかったけど、やっているうちに、なんだかなれてきました。イネかりは、家でもやっています。それで、ぼくは、「じいちゃんのお手伝いをしてみようかな。」と思いながら、イネをかっていました。

イネをさわってみたら、ざらざらしていました。何回かやっているうちに楽しく感じてきました。

ぼくは、「あんなに小さなたねが、こんなに大きくなってくれたんだ。」とっていました。そして、すべてのイネをかってから、コンバインというきかいに入れました。たねを持っている時に、「重たいな。」と思いながら運んでいました。

その後、十一月十四日に、しゅうかくさいが学校の体育館で行われました。ぼくたちが育ててきたお米が、ごはんになって出てきました。ぼくは、心の中で、「ちゃんとお米になってくれたんだ。」と思いました。ぼくは、そのお

米を味わって食べました。

「おいしいな。」

と言って食べました。自分たちで作ったお米が、一番おいしかったです。

大根作りで考えたこと

堂島小学校 三年 福地 花奈子

十一月に大根をしゅうかくしました。たねをまくのが、九月とおそくなつてしまったので、大きく育つかどうか心配でした。しかし、スポン、スポンと大根をぬくと、くさっている大根もなかったし、長くて太く大きく育っていたのでうれしかったです。みんなで、大根をきょう力してあらいました。土をおとした大根は、真っ白くてきれいでおでんの大根に見えてきました。

たねをまくとき、わたしは、大きくなった大根をどうやって食べようかなとしか考えていませんでした。でも、草をむしったり間引きをしたりして世話している間に、いろいろなことを考えるようになりました。

一つは、大根のたねは、どこにあるのかということです。

スイカやきゅうりの中にはたねがあるのに、大根を食べてもどこにもありません。でも、たねをまきました。ふしぎだなあ。おばあちゃんに聞いてみたら、

「春にまいた大根を夏までおいておくと、くきがのびて白いこまかいきれいな花がさいて、その後にできんだよ。」

と教えてくれました。おばあちゃんは、何でも知っていて農業はかせですごいな。本でも調べてみたら、「できた大根を何本かのこしておく、花がさいてたねができる。」と書いてありました。大根のたねってできるんだと思いました。

もう一つは、植物は、どうして一つのたねからいっぱいたねができるのかということです。かぼちゃの中にも、トマトの中にもいっぱいありました。わたしは、たねにはさいしよからいっぱいいたねを作るえいようがあるんだと思います。そして、たねをいっぱい作って、なかまをふやすためだと思います。

わたしの家は農家で、おじいさんとおばあさんが野さいを出荷しています。春から秋までに育てた野さいは、二十しゅるい位です。農業は、大へんですが、ふしぎなこともいっぱいあっておもしろいです。

たいへんだった農業科

姥堂小学校 三年 小関 茉依

「何、農業科って。」わたしは思いました。わたしの家では、農業なんてやっていません。

初めての農業科はとても大へんでした。まずは、土づくりからはじめました。そして石を拾いました。その時は、「なあんだ。農業科なんてかんたんじゃないか。」と思いました。でも、後から種をまいたりなえを植えたりしてとても大へんでした。夏の草むしりは、太陽がてらしてとても汗をかきました。今では、かんたんだと思っていたあの時の自分はずかしいと思っています。そして、こうやって大豆やさつまいも、ミニトマトが出来るのは、太陽や雨、土のおかげだと作業をして思いました。

わたしはだんだん農業の大へんさが分かってきました。そして家に帰って夜ごはんの時間にお母さんとお父さんとわたしで話をしました。その話をするとお父さんとお母さんは、

「すごいねえ。」

「よくやったな。」

などとわたしをほめてくれました。その日から、わたしは

「こんどの農業はがんばろう。」という思いを持ちながら、農業をしていました。

そして、わたしたちは、さつまいもと大豆、ミニトマトのしゅうかくをしました。さつまいもは、根にさつまいもが付いていたので、すぐ重くてすぐ取れませんでした。大豆のしゅうかくは、くきを手で持って引けばすぐ取れました。ミニトマトはあまり取れませんでした。とてもさんねんです。

さいごにさつまいもをちょうりじっしゅうで食べました。とても、おいしかったです。農業科の活動を通して、わたしもみんなもわらっていました。わたしは、「農業科ってみんなをえがおにするんだ。」と思いました。農業科は、大へんだけど、楽しいものだと分かりました。来年もいろいろな作物を育ててみたいと思います。

幸せの花

第一小学校 四年 落合 勇斗

ポカポカと気持ちのいい春、ぼくたちのグループはマリ―ゴールドを育てることになりました。ぼくは、花を種か

ら育てたことがなかったので、あの小さな種を持った時、ドキドキするようなワクワクするような、何とも言えない気持ちになりました。そして、この小さな命を赤ちゃんを育てるようにやさしく育ててあげよう。と決めました。それから、何週間かたつとついに発芽しました。あの時はとてもうれしかったです。そして、成長を記録するのが楽しみになりました。だんだん大きくなってきたので、ポットからプランターへうつしかえることにしたのですが、ポットからはずすと白い根がたくさんはっついて少し気持ちわるかったです。それから、ぐんぐん大きくなり、小さなつぼみがつきました。しかし、そこからがうまくいきません。つぼみは緑色のままでなかなかオレンジ色になりません。そこで、先生に相談すると、「もう少し水をあげたらいいよ。」と言われました。ぼくは、アドバイス通りに水を多めにあげてみました。すると、つぼみは色づき始めました。そして、ついに、パカッと黄色の美しいマリーゴールドがさきました。みんなから見ればふつうのマリーゴールドかもしれませんが、ぼくから見ればまさに幸せの黄色の花です。種から育て始め、病気になつていないかなどと心配しながら毎日見守り、まるで自分の子どもを育てるように大切に、大切に育ててきました。その花は宝石のように黄金

色にかがやいて見えました。

来年の春、ぼくはこの学習を生かし、マリーゴールドを種から育て、そのなえを自分の家の花だんに植えてマリーゴールドのじゅうたんを作れるほどにしたいと思います。植物を育てる楽しさを学ぶことができて、本当によかったです。

ずっと見てきた小豆

松山小学校 四年 佐藤 優希

私は、この春、二つの種を畑にまきました。それは、小豆です。その種は、赤く小さな種でした。私たちの畑の先生が、種をまく道を作って、種が育つため、じゃまをしあわないように、印をつけてくれました。私は、種をまいたあと、畑の先生が教えてくれたように、やさしくしっかりと、土をかぶせました。「こんな小さな種が、本当に大きくなるのかな。」と私は思いました。

しばらくすると、私が植えた小豆の芽が出ました。緑色の小さな芽です。私は、とてもうれしくて、しゅうかくするまで、大切に育てようと思いました。芽は、どんどん大

農業の大切さ

熊倉小学校 四年 長谷川 優真

きくなつて、くきも太くなりました。私は、先生から、黒板用のものさしをかりて、二本の小豆のせいくらべをしたり、二本の小豆のちがいを、絵にかいたりしました。二本の小豆をずっと観さつをしていると、自分の妹のようにとてもかわいく思いました。鳥は、小豆が大好きです。鳥に食べられないか、虫に、くわれないか、雨や風にたおされたりしないかととても心配になりました。

私は、小豆があまり好きではありません。おなべでにと、ねっとりして、色も黒くておいしそうではありません。食べた時の、つぶつぶも苦手です。

でも、私が育てた小豆は、大きなさやをつけて、小豆の実もまるくふくらんで、ピカピカになりました。なんだか、小豆の実も、喜んでるように見えました。

私は、畑の先生が教えてくれた「やさしく育てる」という意味が、少し分かったような気がします。家族のように、世話をして、やさしく育てれば、小さな種は大きく育ち、しゅうかくの時に、答えてくれるんだなあと思いました。今年の冬じには、昔からある、冬じかぼちやを食べて、元気でいようと思いました。

今年、四年生は、ミニトマトや、スイカや、ポップコーンや、キュウリを作りました。最初に土をたがやしていたら、おばさんたちは軽そうにこなしているけれど、じつさいやってみたら、こしがいたくなりました。ぼくが思ったのは、作物は食べられるぐらいになるのには、水くれや、支柱を立てたりしたいへんだということです。だから食事のときは、「いただきます。」「ごちそうさまでした。」を、きちんといって、野菜の命をいただきたいです。

ぼくたちの畑のアドバイスしてくれたのは、支えん員の佐藤さんです。キュウリが大きくなったら、「大きくなつたよ。」と教えてくれました。ざつ草があまりはえないように、下に新聞紙をしいて、その上にわらをかぶせてくれて、ほんとうにたすかっていました。

ポップコーンに味つけて、みんなで、カレーや、チリガリックや、キャラメルや、塩や、バーベキューで食べました。ぼくは、バーベキューが一番おいしかったです。それも、みんなで作ったからだと思います。

夏休みは、プールのあとに、スイカを食べました。その

スイカは、四年生が作ったスイカでした。先生が、半分に切ったら、真っ赤でした。

夏のじゅぎょうのプールのあとに食べた、キュウリは、三年生のときに、大豆から作ったみそをつけて食べたり、塩づけにして食べたりして、おいしかったです。

家の、おばあちゃんとおじいちゃんは、畑をしています。いろいろな野菜を作っています。ぼくは、こう思いました。野菜は、みんなの力と協力や、水くれ、マルチがけ、土をたがやす、それをみんなでやるから、おいしい野菜ができるんだなと思いました。小さなたねが芽を出し、だんだん成長して、おいしい米や野菜がたくさんとれるまでには、人のちえや、工夫が集まっておいしい野菜ができているんだなと思いました。

農業科でがんばったこと

熱塩小学校 四年 菊地 唯

私は農業科を学習して、農業ってすごいなとあらためて強くそう思いました。他の学校は知りませんが、熱塩小学校はたくさん野菜を作ります。たまに家でもお手伝いをし

ます。

学校では、いろいろな野菜をたくさん育てています。私たち四・五年生は、小豆とねぎとにんじんを育てました。小豆は、植えて、育てて、二回に分けてしゅうかくしました。一回目は茶色いさやだけとりました。でも、緑色のさやはとりませんでした。二回目では茶色も、緑色のさやも、全部とりました。聞いてみると、もうすぐ雪がふってくるので、全部とってしまおうそうです。

しゅうかくが全部おわって何日かたってから、収かく祭で使う、あんこもちのあんこを作るようになりました。四・五年生で作りました。まず小豆を洗いました。小豆をに、つぶしてあんこにしました。その日のお昼休みには、四年生の何人かであんこをかきまぜました。ちょうどいいあまさにするのがとてもむずかしかったです。いよいよ収かく祭になりました。自分たちが育てた小豆で作ったあんこもちがおいしいと言ってくれるかドキドキしました。すると家族が、

「あまくておいしいね。」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。つけものの野菜も四・五年生で作ったのを使いました。いとこがつけものが一番おいしかったといっていました。それを聞いて

て、農業科をしてよかったとおもいました。種まきからしゅうかくまでとても大変だったけど、農業科をやれてよかったです。これから進んで農業科にとりくんで、みんなが笑顔になれる野菜を作りたいです。

来年は小豆で赤はんを作ります。その赤はんを一人くらしのお年寄りの人に配ってあげる活動があります。お年寄りの人の笑顔が見れるように、おいしい小豆をつくりたいです。

大切な野菜の命

加納小学校 四年 山口 実莉

「野菜を大切に食べてください。」

この言葉は、支援員の岩下さんがいつも強く言っていた言葉です。私はこの言葉を聞いて、自分で野菜を作って、野菜の命の大切さを知りました。

野菜は、全部種から出きています。種をうえてからすごく大変な作業がまっています。毎朝学校にきて水をあげたり、土よせをしたり、ひりょうをまいたりしていました。水をあげる時に上からあげると土がとびちって葉にかかる

から、ひくいしせいでやるのが大変でした。土よせする時にもくわの使い方がちがうと上手に土をかけられないし、土が重くてすごく大変でした。

いろいろ大変だったけど、野菜がどんどん大きくなるのを見るのは、楽しかったです。そして、しゅうかくしてりっぱに成長しているのを見ると、すごくやったかいがあったなあとうれしくなりました。

その後三、四年生と作った野菜で料理をします。自分たちでカレーを作ったり、おでんを作ったり、すごく楽しいです。その後に、グループのみんなで食べたり、支援員の人たちと食べて、みんなも自分も

「おいしい。」

と言いながらえがおで食べてすごくうれしいです。野菜の命をいただいて、みんなが元気になるんだと思います。

わたしは、この野菜作りプロジェクトをして野菜の命の大切さがよく分かりました。野菜は、栄養が多くふくまれています。そして、作った人の思いもたくさんふくまれています。だから、大切に感じやしながら食べたいです。

自分たちで作ったえだ豆

駒形小学校 四年 大原 綾乃

「おいしい。」

自分たちで作ったえだ豆を食べた。家で食べているえだ豆とはちがう。いろんな工夫をしてえだ豆の味をかえた。一からえだ豆をそだてた。たねをまくところまではかんだ。朝、時間がある日はかならずジョーロでたねをまいたところに水をまいた。水をまきに行くと芽がでていた。わたしは小さい声で、

「ヤッター。」

と言った。いつのまにかえだ豆は大きくなっていた。

「わあ。」

と大きい声でさげんだ。それは、大きいアメシロ。えだ豆の葉っぱにアメシロがいっぱいくっついていて。朝の時間にアメシロたいじに行く。先生とみんなでアメシロたいじに行った。ぼうをもってアメシロをおとしてそのアメシロをふむ。わたしは、ぼうをもってアメシロをおとすことならできるけどおとしたアメシロをふむことはできない。ほかの友達にたのんでたいじしてもらった。わたしはアメシロをおとすことしかできないから、いっしょうけんめいア

メシロをさがした。毎日やっている、アメシロの量がへって来る。先生がえだ豆をよく見て、

「あと、一週間くらいだな。」

と、しゅうかくの日を予想した。

しゅうかくの日がきた。えだ豆を根っこからぬいて豆を取った。と中、足がちくちくする時は、手で足をこすつてがまんした。豆をあらって理科室にもっていく。なべに水を入れてえだ豆をゆでる。二分くらいたったらえだ豆のにおいがした。わたしたちだけで食べるのではなくて、ほかの学年にもあげる計画をたてていた。

「オッケー。」

あじみをした先生が言った。給食の時間にえだ豆を食べることにしている。「おいしい」と言えたのは、みんなできよう力したから言えた言葉だった。

農業大好き

堂島小学校 四年 辰野 楓真

「農業大好き。」

ぼくは大人になったら、家の農業を手伝います。

学校の授業で大豆、にんじん、さやいんげんの三種類を育てました。さやいんげんは芽が出てえだがのび、大きくなると花がさきます。花は白くてかわいい花です。それから実は細長くプクプクとしていて、一本のえだには合計三十本以上あります。しゅうかくは実のぼうしの部分をポキッと折るだけでかん単にとれます。クラス全員で行うので、あつという間に終わってしまいます。ぼくは野菜からポキッと音がするのがおもしろかったです。それから、先生が作った大根もしゅうかくしました。ぬくのは力が必要ですが、ぬくと大きな大根が見えて、

「おー、でかい！」

とみんな声をあげました。みんなにこにこしてとても楽しそうでした。ぼくは土の上から見えていた大根の様子とはちがうので、どんな大きさの大根がとれるか楽しみながらぬきました。

今、農業をする人はどんどん少なくなっているそうです。でも、農業がなくなれば米や野菜がなくなってしまうです。パンや肉や魚があっても、人間には野菜はぜっ対に必要です。野菜にはミネラル、ビタミン、カルシウム、食物せんい、たんぱく質、鉄分などいろいろな栄養がふくまれています。野菜はまるで病院の薬のようです。体の調子を整え

るのに必要です。

ぼくは農業科の授業を勉強して、栄養のことはもちろんですが、農業はとても楽しくて大切だということが分かりました。ぼくはそんな農業を大人になったら、ぜっ対にやりたいです。でも、ぼく一人の力では足りないのです、農業のことを良く知っているしえん員のようなおじいちゃんや友達がふえてほしいと思います。

初体験で学んだこと

第一小学校 五年 山内 恵美

私は五年生で生まれて初めて、田植えや稲かりを体験しました。

私が体験して、一番心に残ったのは、茶わん一ぱいのご飯は約百本の稲を使うことです。稲一本で、四十つぶ以上あるので、一ぱいで四千つぶ以上になります。私は稲かりしたとき、百本はどのくらいかなと思ったら、すごく多いと思いました。そしたら、田んぼ一つで茶わん何個分なのかなと思いました。私はいままでなにげに食べていたお米は、農業をしている人にとっては、すごく大切なものなん

だと思いました。

次に私がこの体験をして楽しかったことは二つあります。まず一つ目は、田植えです。最初は、入るのがちよつといやだなと思ったけど、でも入って田植えをしてみると、おもしろくて、ほとんど入っていました。下にあった石はちよつといたかったけれどすぐ楽しかったです。

二つ目は稲かりです。なぜ楽しかったかというと、かまで、稲をかるのが楽しかったからです。一たばをかる時、一気にかれるのが一番楽しかったです。

私は今年、田植えや稲かりなどを体験して学んだことは、米を大切にすることです。百本で茶わん一ぱいなどのことを考えると、お米はすごくきちやうだなど思いました。それを食べている私たちは、農業をしている人が大切にしているので残さず食べたいと思いました。だからこれからほつと米を大切にしていきたいです。

ぼくが考えたこと

関柴小学校 五年 渡邊 匠

みなさんは、米作りでどれだけ機械に助けられているか

知っていますか。

ぼくは、総合の時間に農業の米作りを昔ながらの方法で行って、機械のすごさを感じました。昔ながらのやり方が悪いとは思わないけれど、とても大変だったからです。

四月は種まきとビニール苗床への水まきをやりました。家では水はホースで自動でまくのに、じょうろに水を入れて運びます。面倒だし、一日忘れてしまうと苗がしんなりとしてしまつて、やり続ける大変さを知りました。

田植えは楽しかったですが、たて横を等間隔で植えるのが難しかったです。肥料をまくのも粒を大きなスプーンで投げてやりました。思ったように飛ばなくて、均等に育つかどうか不安になりました。

一番大変だったのは稲かりです。一株ずつ鎌で刈ります。刈るのは簡単でしたが、束ねるのがなかなかできなくて、昔の人は、器用だなあと思いました。五、六年生全員で二時間頑張ったのに、田んぼの四分の一もできなかったです。なのに、コンバインで残りをあつというまに刈りました。すごいと思いました。脱穀も足踏み式脱穀機でやりました。千歯こきも使ったけど、なかなか一度にできずにイライラしました。もみすりも手でむいたり、ボールでこすったりしたけど、上手にむけなかったので、この米は食べられる

のだろうかと疑うほどでした。

このような活動を通して、やっぱり機械は大切だと思います。今は農業をお年寄りの人がたくさんやっています。ぼくが大きくなって手伝えるようになるまでに、もっと機械が進むと思います。農薬をまかなくてもすむような草とりの機械とか、水の管理をする機械とかです。機械は高いとおじいちゃんは話していたけど、みんながおいしいお米を食べるためには必要だと思います。

農業科について

慶徳小学校 五年 齋藤 優斗

ぼく達の学校では、野菜、米のさいばいをしています。野菜は、ジャガイモ、サツマイモ、大豆の三種類を、植えました。初めてのころは、植え方がわからなく、お世話になっている、四人の、支援員の皆さんに、教えてもらいました。支援員の皆さんは、とても親切でいいねいに、教えてくれます。

まず野菜です。畑の土をいしょくべラでたがやします。次に、肥料を土といっしょに混ぜて次に、種を植えます。

植えた種に土をかけ、水をまきます。日ごとに、観察し、芽がでてひと安心です。このまま順ちように育つことが、ぼくにとつて楽しみです。

収かくの時期には、支援員の方と植えた野菜を、ほります。とてもおいしそうに、大きいから小さいのまで出てきました。土の中には、どんなひ密がかくされてるのか不思議です。

秋には収穫した野菜で、お世話になった、支援員さんに、ぼく達が、カレーを作り、全校生で収穫祭をしました。ふかしたサツマイモも食べました。ぼくは、本当は野菜がいだけど、みんなで心をこめて作ったので、おいしくて残さず食べました。

農業科の学習を通して感じたことは、農業の大変さです。ぼくは特に、大豆の種まきをした時、なかなか芽が出なくて心配した事を思い出します。他には、稲刈りも大変でした。たくさん稲刈りしてるうちに手や腰が痛くなってきました。今年は、夏に雨が少なくてお米がちゃんと実るかも心配でした。こんなに農業が大変だとはわかりませんでした。

そんな農業をどうしてやるのか考えてみました。大変だけれども育ったり、収穫できたりした時うれしい気もちにな

りました。何より自分達で作ったお米や野菜は、とてもおいしいです。自分達の苦労がおいしさにつながっていると思います。

だから、これからも農業科の学習を大切にしてがんばっていききたいと思います。

お年寄りの笑顔を見れた赤はん配り

熱塩小学校 五年 遠藤 伶菜

私たちの学校では、毎年一人暮らしのおじいちゃんやおばあちゃんたちに、もち米と小豆で作る赤はん配りをしています。私は、五年生になってから、笑顔の赤はん配りを楽しみにしていました。なぜならば、ふだんの生活では一人暮らしのおじいちゃんやおばあちゃんたちと話す機会が少なく、おじいちゃんやおばあちゃんたちの笑顔を見る機会がありませんからです。私はこのような行事があるので、とてもうれしいです。私たちは学校でもち米、小豆を作っているのが学校で取れたもち米と小豆を使いました。赤はんは食べたことがあるけど、自分で作ったことはありません。

いつも、おばあちゃんがおいしい赤はんを作ってくれます。今回は、初めて赤はん作りに挑戦しました。先生とも作りますが、今回は、民生委員の方々とも一緒に作ります。

赤はんの作り方は分らないので教えてもらいながらやりました。最初は「むずかしいのかな。上手にできるかな。」

と思いましたが、思ったよりもかたんでした。赤はんが出来上がったらパックに詰めて完成です。赤はんが少しあまったので、民生委員の人たちがおにぎりしてくれました。自分たちで作った赤はんは、とてもおいしかったです。

赤はんを食べたらいいよ、楽しみにしていた赤はん配りです。少しきんちょうしましたが、民生委員の人に、

「きんちょうなくて、大じょうぶだよ。」

と言われたので気持ちになりました。一人目、少しきんちょうしましたが、一人暮らしのおばあちゃんはとても笑顔で受け取ってくれたのでとてもうれしかったです。六人のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、とても笑顔です。きでした。お年寄りの笑顔を見れてうれしい気持ちになりました。赤はん配りは、いい経験でした。これからは一人暮らしのお年寄りとは少しづつ話したいと思います。

「命」から命 そして笑顔へ

加納小学校 五年 長井 穂乃実

「命」を育てる。そしてこの命が命をつないでいく。これは、とてもすばらしいことだと思います。

今年は、初めて米作りをしました。大変な作業がたくさんありました。その中でも印象に残った作業が二つあります。

一つ目は、田の除草です。全部で五回やりました。初めのうちは、ころばしが重くて足もころばしもうまって、「うわー。大変。やだなあ。」と少し思っていました。でも、ころばしが進むことによつて田がきれいになるのは、お米も田んぼもうれしいかなと考えたので、足がうまっても六年生と協力してがんばりました。除草が終わって田を見ると、田もいねも笑っているように生き生きして見えました。私たちも、

「よかったね。」

と笑い合っていました。

二つ目は、稲かりです。ずっと楽しみにしていた稲かりは思ったよりこしがいたくなりました。でも、「こんなに大きく育ってくれたんだ。」と、とてもうれしかったです。

今まで、がんばってきたてよかったと心から思いました。

フェスティバルでは、そのもち米でもちを作って食べました。食べる時一・二年生が、

「やわらかくてすごくおいしい。」

とほっぺにあんこをつけてかわいい笑顔で言ってくれました。

「一人ぐらしの老人にできること」という活動では、私たちが育てたもち米で、赤飯を作って一人ぐらしの方にとどけました。その時もみんな、心が温まるような笑顔と「ありがとう」という言葉で受け取ってくださいました。とてもうれしく、感動しました。

「命」を育てることは、とても大変です。でも、その「命」を育てることによつて周りに笑顔がふえるのは、とてもすばらしいことだと思います。私はみんなが笑顔になるこの農業科が大好きです。

お米一つぶの大切さ

堂島小学校 五年 加藤 万結

少し、くもった日に、いねかりをした。農家の方、支援員の方が来て、いねの刈り方の説明をしていた。くもって

るのに暑い。刈るのなんてめんどくさい。なんで私達にやらせるの。早く帰りたい。話を聞かず、ずっと心の中で言っていたら、

「では、始めてくださーい。」

早く刈って、早く帰ろう。

ザッザッザッザッ。

「持ち方がうぞ。もつと下を刈りなさい。」

もつと下か。ザッ。

「もつと下。土の上につくくらい。」

はい？そんなに下を刈るの？五年間やってきて初めて知った。そう教えて下さったのは、農家の方だった。

「今はパンとかいっぱいあるけどな、昔は米一つぶ一つぶが貴重だったんだぞ。米一つぶでも残したら、家の中に入れさせてもらえなかったんだから。」

笑いながら言った。笑い事なのか？でもその言葉でわかった。家の中に入らなかったのは、一つ一つ手作業で苦労してやっていたのに、残したからだろう。今は機械があつて楽だから、残しても入れてもらえるのだろう。

私は、お米一つぶの大切さが学べたのは、学校でこのような学習に取り組んでいるからだと思う。日本は、おなががいっぱいになれるいい食文化の国だ。だからずっとその

主食の米を食べていきたいと思う。そして田んぼに、お米が落ちていたら、拾って、食べてあげようという気持ちで、出されたご飯、おかずを残さず食べようと思った。

農業科で学習した事としょうらいの夢

姥堂小学校 五年 須藤 旭陽

ある秋の夕ご飯、じいちゃんが

「このつけ物うまいなー。」

と、言いました。このつけ物は、ばあちゃんがつけた大根のつけ物です。そしてその大根は、ぼくが五年生の農業科で、育てていると中でまびきした小さめの大根です。

今年ぼくは、農業科で多くの種類の野菜と花を育てました。その中でも大根は、他の野菜とはちがって種から育てなければならなかったし、まびきといって小さめの物をぬき、大きめの物に栄養がよく行きわたるようにするための作業がありました。種から育ててここまで育ったのにとつてしまうのはかわいそうと思いました。一本一本を大きく育てるには、大切な作業なんだなと後からわかりました。また、水くれをわすれてしまって、次の日見てみると少し

元気がないように見えたので水くれはとても大事なんだな
と思いました。

そして収かくの時がきました。折れないかとすこし不安
でしたが、雨がふった後だったのでぬくのが意外とかんた
んでした。収かくした大根は、大きく、ふとくりっぱでし
た。とても達成感がありました。そして、収かくした大根
は、家に持ち帰りおでんに入れて食べました。あまりおで
んの大根を食べない弟も、

「おいしいー。」

と、言って食べてくれました。ぼくは、自分が育てた物を
食べてくれた人が「おいしい。」といってくれたのがとて
もうれしかったです。ぼくは、しょうらいじいちゃんとは
あちやんがやっている農業をついで野菜をいっぱい育てて
もっと多くの人に、「おいしいー。」と言ってもらえる野菜
を作りたいです。

心に残った農業

駒形小学校 五年 大堀 瑞希

私たち、五年生は、六年生と協力しながら米作りの学習

をしました。担当の、辺見さんに教わりながら、学習しま
した。

まず始めに、定板という道具で土に線を引き、その線の
交わったところにいねを植えます。足が土にとられ、しり
もちをついてしまう人が出てきましたが、土は思ったより
温かくて気持ちよかったです。米作りで大切なことも分か
りました。雑草取りです。ヒエという草は成長が早いので、
草取りをしなければなりません。ころばし、という便利な
道具で草を取りました。使い方は、草がある所にころばし
を走らせると、草が土の中に入り、稲の肥料になると、辺
見さんに教えてもらい、おいしい米ができる楽しみでし
た。道具でとれない草は、手作業で行いました。草と稲の
区別もついてきました。

秋になり、辺見さんが稲かり専用のかまで、稲かりの見
本を見せてくれました。手を切る可能性があるので、気を
つけながら行いました。稲三束取り、稲で結びます。少し
難しい結び方なので、練習して覚えました。ずっとやって
いると声が聞こえてきました。

「こしが痛い。」

とても大変な作業でしたが、がんばりました。取った稲
を、ほっかけぼうという物でほしました。一週間たつてう

ら返し、乾燥するまで二週間かかります。だっこくする作業は、残念ながらできませんでした。

何週間かたち、連らくがありました。玄米だと約百キロ、精米すると約九十キロ、米の収穫でこの量は初めてだと辺見さんが話されていたのを聞いて、うれしくなりました。駒小祭りのバザーに出す米を三合ずつふくろづめしました。たくさんあったのでみんなで一ふくろずつ持ち帰り家でたいて食べたなら、お父さんとお母さんが、

「おいしい。」

と言っていました。来年は、今年よりも、もっと多く収穫したいと思います。

カボチャの命をありがとう

山都小学校 五年 平井 理子

今年、私達は農業科の授業で、枝豆などの野菜を育てたり、田植えや稲刈りなどのいろいろな活動をしてきました。その中でも、一番心に残っていることは、カボチャを育てて食べたことです。六月の初め、農業科で使う畑に行ってカボチャの苗を植えた時、畑には虫がたくさんいて、雑草

もたくさんはえていました。私は、（ちよつといやだな。）と思いながらも苗植えをしました。農業は自然の中でやることだから、虫がいても雑草がはえていてもおかしくないと思います。農業はあんまり好きじゃないという気持ち

が心の中になりました。夏休みに観察のため、畑をおとずれました。夏の日差しがふりそそぐ中、カボチャは前よりずっと大きくなっていました。そして、よく見ると、大きなカボチャの実がなっていました。（こんなに暑いのによく育って身をつけられるな。）と植物の生命力に感心しました。人間よりずっと小さな体なのに、こんなにもがんばっている姿を見て、私もがんばろうという気持ちと野菜ってすごいという気持ちがわいてきました。

それからしばらくたった二学期のある日、カボチャのしゅうかくに、また畑に行きました。実の数も増えていて、大きなカボチャがたくさんとれました。私は、今までずっと世話をしてきたカボチャを見て、農業ってすばらしいという気持ちがあふれました。とれたカボチャは後日、食生活改ぜん委員会のみなさんといっしょに調理をして食べました。カボチャ料理はどれもおいしくて、がんばって育てたかがありました。私は、カボチャ料理を食べながら考

えました。(カボチャは、きびしい夏の暑さにも負けない命を持っている。カボチャは生きているんだ。その命を私がいただいているから、私達はカボチャに感謝しないとなんだ。いただきますという言葉で。) 私は、これからこの思いを大切にしようと思いました。そして農業が好きになりました。

おいしい野菜づくりをめざして

高郷小学校 五年 横川 千亜希

私たち五年生は、きゅうり、ミニトマト、枝豆、じゃがいもを畑に植えました。そのころ私は「毎日水をかけて、大きく育ってくれたらいいな。」と思っていましたが、休みの日になると、つい水かけに来るのを忘れてしまうことがあります。でも、夕方それに気がつき畑に来ると、昨日はまだ細かったきゅうりが、とても大きく太くなっているのです。私は、どうしてこんなにもすぐに、立派なきゅうりになるのだろうかと考えました。ミニトマトも緑色の実がなり始めたと思ったら、すぐに真っ赤に色づきます。作物の成長は、すごいと思いました。私たちに命があるよ

うに、作物にも命があります。そして、夏の暑さにも負けないで、どんどん育つ力強さもあります。作物の命は、本当にすごいと改めて感じました。

夏になり、きゅうりもミニトマトもたくさん収穫できました。水洗いをして、みんなで食べた時、私は感じたことがありました。それは、私たちでもこんなにおいしい野菜が作れるのだということです。水かけを忘れてしまったことがありました。が、こんなにもおいしく育ってくれて、心から感謝しました。そして、もっともっとおいしい野菜を作れるように、自分たちができることを考えていきたいと思いました。来年作る野菜には、肥料をあげたり、きちんと水をかけたりして、今年よりもおいしくなるようにしたいです。

私の祖父母も、畑でいろいろな野菜を作っています。時々、学校の畑にいっしょに行って観察もしました。私は、将来農業の仕事をするかどうかは分かりませんが、作物を育てることの大変さと大切さは、少し分かったような気がします。今年の野菜作りの反省を生かして、また来年もおいしい野菜をたくさん作りたいです。そして、今まではほとんど自分の家の畑仕事はしたことがないのですが、これから野菜作りの手伝いにちよう戦してみようと思います。

農業の大切さについて

第一小学校 六年 佐藤 朱里

私は、初め、農業の大変さをわかっていなかったのだと思う。

教科書に書いてあった手順通りにやればいいと思っていた。五年の初め頃の私は、農業科の学習で田植えをし、おどろいた。

田んぼの中に足を入れると動きにくかったり、こしを低くした体勢のまま歩くのがつらかったりと、私は農業がどれ程大変か実感した。しかし、私が体験したのはごく一部で、他にも大変な仕事があることを知った。

六年である今年は、もち米を作った。育て方の差は私にはよく分からなかったが、大変な作業であることに変わりはなかった。

私は、こんな仕事を毎年行っている農家の方々を凄と思う。私は農業科の学習が楽しかったと思うが、仕事としてやるのは難しい。私が農業科の学習が楽しいと思えたのは、草むしりなど的大変な仕事をやってくれた人がいたからだ。私なら草むしりなどの仕事を途中でやめてしまうかもしれない。

しかし、皆が農業をやめたらどうなるだろう。それまで作られていたお米などの作物がなくなってしまう。私達がおいしいお米や野菜を食べられるのは、農業を営んでいる方々のおかげなのだ。

とても大変な仕事をこなし、私たちの食事にお米や野菜をもたらしてくれる人達には、感謝をしなければならぬ。しかし、それが当たり前、という考え方をしてしまうことがある。

私は、お米や野菜があるのは決まって当たり前じゃなくて、農家の人達が一生けん命作ったものなんだということをお忘れずに食事をしたと思う。

作物の命

上三宮小学校 六年 佐藤 靖乃

作物だけに限らず、植物は動くことも、言葉を話すこともできない。

今年、農業科のコメづくりは、支援員さんの指導のもと、たくさん、大きく育った。とてもうれしかった。だが、稲をかりとった後、疑問が出てきた。稲をかりとった後に、

芽が出て、葉が出て、少したつと穂ができた。人の手を加えるより早い。私は父に、

「なぜあんなに早く育つのに四月頃からやるの」

と質問した。父は、

「長い間育て、大きくしてから収穫するから。」

と答えた。そしてもう一つ父はこう話した。

「穂ができる季節だから、種は子孫を残そうとするから早く育つんだ。」

植物は、人間の私たちよりも、強く、すごい生命力を持っているのかもしれない。四年生の頃、ヘチマをみんな育てた。私たちは、あまりヘチマに水をあげなかった。なのに、大きく育ち、種をしつかり残した。だから、植物は、とってもすごい生き物だと私は思う。そのすごい生命力に、人の手を加えて、病気にかかりにくくしたり、おいしくしたり、寒さに強くしたりして、作物は私たちの食卓にやってきた。だから、私たちは私たちのごはんになる作物に、感謝しなくてはならない。もちろん作物を作ってくれる人にも感謝しなくてはならない。

私たちは、普段なにげなくごはんや、給食などの食べ物を残して、捨てる、ということたくさんやっている。それは、たぶん命をいただいているという自覚があまり無い

からだと思う。スーパーで売ってる食べ物も、自分たちで収穫した食べ物も、全部、みんな等しく命だということを私たちは忘れてはいけないと思う。

作物を上手に育てる時に大事なこと

姥堂小学校 六年 入岡 久瑠実

「じゃが芋作りは初めてなので、がんばりたい、草むしりや水やりも忘れないようにしたい。それに畑にも毎日行きたい。」

これが今年の私のめあてです。

私はじゃが芋の収穫はしたことがあるけど、種芋から育てるのは初めてでした。私はつぶつぶの小さな種から育てると思ったけれど、種芋といって、じゃが芋を二分の一や三百五十グラムから三百グラムぐらいに切ったものをまきました。種芋をまいてから一ヶ月くらいすぎてから、支援員の方が細いくきを間引きしてくださいました。間引きをすると、栄養が太いくきの方にいって、大きな芋になるそうです。今度じゃが芋を育てるときは、自分でやってみたいです。支援員の方が、

自分も成長できた農業科

姥堂小学校 六年 斎藤 流月

「じゃが芋は水はもういらないよ。」と、言っていました。最初のうちだけでいいんだなと思いました。それから二ヶ月たち、収穫するときは、土はサラサラで、たくさんじゃが芋が収穫できました。良かったです。

自分のめあてにしていた草むしりや水やりを忘れずに、毎日畑に行きたいということは、実は、初めのうちだけで、夏休みごろになると、めんどろだなど、草むしりや水やりをしない自分がいました。そして何日も畑に行きませんでした。でもばあちゃん、毎日畑に行き、水やりなどをしていきます。収穫の時期になると、たくさん野菜をもってきました。それが作物を上手に作るために必要なことです。

私は、一人では上手に作れないと思いました。作物を見に行かなかったで落花生が枯れてしまいました。水をたくさん飲みたかったと思いました。作物の気持ちを分かってやれなかった自分はずるいなあと反省しました。なのであの時水やりをしなかったのだらうと後悔しました。きちんとやっていたら、もっといい作物ができたのかなと思いました。作物作りは難しいと思いました。

農業は食べる物を作る大事な仕事なので農業をする人がもっと増えるといいと思います。

「はあ：。」

今年の農業で私のため息をついた理由は二つ。一つめは毎日の水くれが大変でめんどろな事。二つめは里芋がねずみに食べられたり、綿の苗が育たなかったり、頑張ってもうまいかない事があつたからです。

里芋は、毎日水やりをすると教えていただき、水やりをしているとどろが運動着について汚れ、嫌になることもありました。

「毎日水くれなんて、めんどろくさい。」

と口では言っていましたが、心の中では、大きく育てほしい、と思っていたので、ちゃんと水くれをやり続けました。

今年の里芋は、水やりを去年より頑張ったのにもかかわらず、ほとんどの人が芋をねずみに食べられてしまって、細く短いくきがあるだけでした。綿は育苗を三回失敗してしまいました。種をまいても芽が出なかったり、芽が出ても枯らしてしまったり、畑に植えた後、枯らしてしまったりしたので、支援員の先生が心配して、綿の苗をもらって

きてくださいました。それで、ようやく綿を育てることができました。それでも、私は悲しかったです。毎日水くれをして、何日もかけて野菜作りを頑張ったのに、食べられってしまったので、とても悲しかったです。それと同時に、すごく悔しい感情があふれてきました。

私は、学校で四年間、農業科を学習してよかったなあ、と思います。なぜかと言うと、野菜のつくり方が分かったからです。また、初めて野菜がつくれた嬉しさや、野菜づくりを失敗してしまった悲しさ、そして、ねずみやもぐらなどに食べられてしまった悔しさなどが分かったからです。農業科を学んだことで私は、野菜だけでなく、自分も成長できたなあ、と感じました。中学校に行ってしまったらやらなくなってしまう農業科だけれど、小学校でたくさんできたので良かったです。そして私は、農業科は大切な学習だと思いました。

作物を育てるといふ難しさ

姥堂小学校 六年 中川 陽菜

「わあ。たくさんできてる。」
「すごいね。」

畑に行った友達が言いました。今年の夏は雨が降らず水不足になり、畑に水がなかないきませんでした。それにも関わらず作物が上手にできたのは、私たちだけが苦労したからでしょうか。いいえ、私たちだけではこんなうまくできませんでした。

私は支援員の方々や先生方などの支えがあったからだと思います。支援員の方は、畑に行って作物の様子を見に行ってくださったり、綿の苗がうまく育たなかったのを知って他の所から手配してもってきてくださったりしてくださいました。それに、遅くできる種類のかぼちやも教えてくださいました。今年は私たちの校舎は耐震工事のため、水やり当番の割り当てがなかったので、先生方が代わりにやってくださいました。支援員の方々や、先生方はいやな顔一つもせずにやってくださいました。

対面式で支援員の方に水やりを忘れない事、畑に足を運ぶ事を守るように言われました。私たちは、水やりをたくさんしました。雑草ぬきなどもやりました。あたりまえの事だけど、大切で大変なことです。そのあたりまえのことをめんどくさいからと言って少しでもやらないでいると、作物がだめになったり、後から苦労をしたりして、大変です。少しでも楽しようとすると、いい事がないということ

もあらためて学びました。

今の地球は、地球温暖化のためか、雨が降らない日が続いたり、集中ごう雨などの異常気象が見られます。そんな厳しい自然の中で作物の育て方を教えてくださいました。だめな所は注意し、いい所はほめてくださいました。私の家も農家で、おばあちゃんやおじいちゃんが野菜を作っています。いつも食たくにならぶ食べ物にもっと感謝して食べたいと思います。農家は経験を積み重ねることが大切で感謝する事も大切だと私は思いました。

小さな芽から

駒形小学校 六年 友田 優子

地面から出たとっても小さなじゃがいもの芽。私は、「こんな小さい芽から、じゃがいもができるのかなあ。」と思いました。

夏の暑い日は、みんなでジャングルみたいにいっぱい生えた雑草の草取りをしました。

みんな、汗をたくさんかいたけど、ジャングルみたいだったところがとつてもきれいになっていました。また、何日

も雨が降らなかったときは、水やりをしたりして、一生けん命に大きくて、おいしいじゃがいもに育ってほしいと思しながら育てました。すると、最初はあんなに小さかった芽が、日に日に大きくなって、立派なじゃがいもに育っていました。

そして収穫祭、みんなでいっしょけんめい作った野菜やお米、じゃがいもなどをカレーライスにして食べました。地域の方々、お父さん、お母さんなどみんな、

「このカレーライスとってもおいしいね。」

などと、笑顔で言ってくれました。私は、自分達で作ったものをみんなが喜んで食べているのを見て、農業っていいなあと思いました。

それは、みんなが笑顔になったり、幸せな気持ちになったりするからです。

草取りをしたり、水やりをしたりしたときも、どんどん育っていくじゃがいもを見て、

「こんなに大きくなったね。」

と、うれしくなりました。じゃがいもを収穫したときは、友達といっしょに、

「こんなじゃがいもがあつたよ。」

などと、笑顔で話しながらじゃがいもをほるのがとっても

楽しかったです。

最初は、あんなに小さかった芽から、こんなにたくさん
の幸せがありました。私は、農業で自分もみんなも笑顔に
そして幸せな気持ちになるのがすごいと思いました。私は、
農業は、すばらしいものだと思います。

農業の大切さ

駒形小学校 六年 小滝 樹奈

私達の学校では、毎年お米や野菜を作っています。

収穫した野菜は給食で調理して頂いたり、家に持ち帰っ
て食べたりします。

でも、今年は「私達が作ったお米や野菜を地域の方にも
食べてもらいたい」というみんなの願いから、駒小祭りで
地域の方に食べて頂きました。

私達が育てた野菜は、里いも、さつまいも、かぼちゃ、
じゃがいもです。私達は、それを春から育ててきました。
夏はとても暑くて、草むしりをやったり、畑に水をやっ
たりするのはとても大変でした。

でも、野菜やお米は私達が草むしりや水くれをやらない

と暑くてかれたり、雑草に負けておいしい野菜やお米にな
りません。だから、私達もがんばらないとおいしい野菜や
お米ができないと思い、みんな必死でやっていました。そ
の結果、野菜はおいしくでき、お米は過去最高で九十キロ
グラムもとれました。

私は、そのことを家の人に話すと、
「すごいね。九十キロもとれたの。」

とみんなびっくりしていました。

今年は、収穫した野菜やお米を駒小祭りの時に、ご飯は
炊いて頂き五・六年生でカレーを作り地域の方にふるま
いました。大人の人や小さい子、そして地域の方から、
「みんなの作ったカレーおいしかったよ。」

と言われました。

私は、自分達が作ったカレーをみんなから「おいしい」
と言われてとてもうれしかったので、
「ありがとうございます。」

と笑顔で応えました。

私達にとっては、最後の収穫祭。私達が作った野菜やお
米を食べて頂いてとてもうれしかったです。

喜多方市農業科に寄せて

「いのちの教育のサイエンス

く 小さないのちの無限の広がりと生態、農の暮らし」

宮城学院女子大学学芸学部教授 佐藤幸也

1 花開く喜多方市小学校農業科

「喜多方市小学校農業科」が始まってから六年が過ぎた。この間、数千人の子どもたちが喜多方市・会津の農業、農村文化を体験し学習したことになる。最初の子どもたちは高校生となり、今自分の将来を模索していることだろう。仕事や勉強のため故郷を後にする青年たちは少なくないだろう。が、この若者たちが独り部屋で居るときや喜多方と似たような風景に出会った時、きつと美しい喜多方のたたずまい、命あふれる田園や森林、自分を温かく見守り育ててくれた家族や先生方、友の姿を甘露のような水や笑顔全開でほおばったご飯などとともに思い出すことだろう。どろんこになって田植えをした記憶が支援員の方々の優しさと共に思い出されることだろう。「農業大好き」「喜多方大好き」と作文に書いた子どもたちが、日本、ひよつとすると世界のあちこちで喜多方のことを語ってくれるかもしれない。そのように考えると、本農業科の実践がまいた種は徐々に花開き、そして新たな実を付け、種を宿していくことになる。

実際に、様々な反響があり、このような教育を我々の地域でも実践したい、という声はよく聞く。

2 小学校農業科はヒューマニズムの教育である

今年からNHKで「八重の桜」が放映されているが、我が国社会福祉の母とも言われる瓜生岩子や社会教育の源流とされる修養団生みの親蓮沼門三（わが国社会教育の源流 修養団八十年史『昭和六十年』）。苦難から立ち上がり郷土の復興再生を求めて闘った自由民権運動、会津・喜多方事件（という）言葉は使いたくないが）は、ヒューマニズムの闘いでもあった。日本の近現代史を振り返ると、多くの輝ける人々を喜多方が生み出したことがわかる。

その人々に共通するのは、困難を克服し、社会のため、人々のために生涯を捧げたことである。きらびやかな言葉で語ることなく、控えめで、誠実に取り組み続けた。このように、日本が世界から賞賛される美しい精神のエキスが喜多方では生き続けている。特別な著名人や華やかなスポーツライトを浴びなくとも、そこかしこに喜多方人（ビト）がいる。過酷な近現代史を持つ会津の人々は、貧しい、重い苦しみを背負う、悲しみにくれる人々に、慈愛の眼差しを向け、寄り添い、その「生」を励まし続ける。幼く小さな魂を仏の掌（たなごころ）で包み込む。

「小学校農業科」の根底にあるのは、まさにこの「生」への慈しみである。支援員や教育委員会の方々は、子どもたちに対して胸の奥深くまで、あたかも飯豊山の伏流水のごとく沃野を満たす農の心を語る。

これらの人々が協力しあつて「小学校農業科」は支えられ、子どもたちは命のつながりや尊さを学んでいる。森や田畑にはウィスルレベルのミクロな生命体から大型獣、家畜、我々ヒトがおり、それらはすべて宇宙の誕生、地球の生命と密接なつながりを持つ。置賜地域（「草木塔の碑」）や会津流に言えば隅々まで仏性が満ちているのである。

歴史的に見れば農業科のような「自然の教育」はルソーの主張に見るような理想主義的系譜につながる。ちなみに日本で戦前に設定された「農業科」は産業資本主義から帝国主義段階に至る日本の資本主義的發展に対応する労働能力の基礎を育成する目的があつたが、実践として展開されたそれは土の教育、郷土教育運動、労作教育へと広がっていく。これらは大正自由教育、世界的に見ればデューイやキルパトリックなどによつて展開された新教育運動（Progressive Education）につながる面も持っていたことも見逃せない。

そこでは、キリスト教的に言うならば子どもの精神・魂の中に神を見いだす、日本的に言うならば仏が宿っている、ということとを信賴し、そうした善なる魂を育てていくという理想主義的教育観がある。言うまでもなく、カントはその善なるものを道徳性、倫理と位置づけ教育の目的や方向性を示した。教育学者小川太郎などは「陶冶と訓育」の理論として整理しているが、サイエンス・知性と道徳性、社会性の調和的発達を目指す教育は長い間模索され続けているのである。

ここまでつなげるのはいささか飛躍ではないか、という議論があるかもしれない。しかし、喜多方市の教職員や農業科を支えている支援員、農業科で育つ子どもの保護者たちは、ともに子どもが健全に、優しく育つという願いを共有している。未来に希望を託して幸せであることを願っている。昨今の教育が短期的評価に囚われ成果主義となる中で、じっくりとヒトに育つことを待ち、育ちゆく子どもたちに希望を託すのはロマンティズムであり理想主義的期待と言つていいだろう。

そのことを子どもたちの作文からも読み取ることができる。約二千人の子どもたちの作文は実に多彩で学ぶ喜びとところが耕されていく様子が記されている。担任の先生方、家族、地域の人々、皆が子どもたちの幸せを願つて手を携えているからこそできる実践であり、そこで育つ子どもたちの「へこころ」である。

そこには確かな学力形成も見ることができる。「農業科で算数の時間が減る」という声を耳にすることはあるが、学力が下がったという意見はほとんど聞かない。毎年寄せられる作文からは、むしろ知的好奇心を開花させ、科学に迫り、保護者や周囲の人々への感謝する心、みんなの役に立ちたいなどの、人間として大切な幹が太く形成されているのがわかる。子どもたちは観察力、追究力、洞察力を磨き上げ、大人たちとの貴重な体験を共有すること、賢く、優しく、思いやりのある子どもに育っている。

農の教育の底力が発揮されているのである。

かつて耶麻郡は報徳思想の普及に努め、学校教育に取り入れたことがあった。幕末から近代にかけて会津の人々は、荒れなるとする山河に命を吹き込み、ムラを蘇らせ、子どもたちの未来を開くために共生、勤労、努力、他者へのいたわりと慎みなどを農によるいのちの育ちあいが大切な教育課題だとして、地域の教育の柱に位置づけたのであり、会津の歴史や風土を活かした子育ての知恵であった。

「農は国の基」である。田中正造が山河を荒らし命を粗末にするのは文明的行為ではないと厳しく批判し、谷中村の人々と生死を共にした理想（主義）は、新自由主義の強欲な超国家資本主義システムによってまさに今日世界中が直面している生命の危機を予見したものであった。喜多方にとって恩ある中村桂子先生が主張する生命科学と倫理の課題はこの点を指している。

3 グローバル・イシューとしての小学校農業科

このように考えると、中村先生のアイデアが活かされた「小学校農業科」は、地球が抱えているグローバル・イシューそのものであることが理解されよう。名古屋で開催された「生物多様性締約国会議」(COP10)は、リオデジャネイロでの会議を発展させた人類史に残る重要な会議であったが、日本のイニシアチブによって「SATOYAMA 里山」及び「水田決議」がなされた。実は、その国際条約に匹敵する内容を地域で実践しているのが「小学校農業科」だと言えれば言い過ぎだろうか。(＊こ

の時、佐渡の朱鷺、豊岡のコウノトリ、宮城県北のガンや白鳥などの渡り鳥が紹介された。いずれもラムサール条約に認定されている。)

「農業科副読本」や教師用の指導の手引きでも触れてあるが、農業科で学習することは「農」の思想を学ぶ以前の問題として、「事実」「事物」に対峙し、それを正確に捉え、全体像を明らかにし、そこに隠されている自然の論理や社会的現象をつなぐ論理を追究し、新たな課題の高みへ上る行為である。そうした学習は欧米を中心に数多く取り組まれており、同時代を生きる私たちや子どもたちにとって、世界の人々とそれぞれの地域で共に学んでいるということと、そこから新たな知恵や人類が共同・協同して取り組むべき地球的課題であり、それに対して責任(倫理)を確立すると言うことにつながる。つまりグローバルな課題に向き合うことで「知性」を磨いているのである。

だから、「農業科」の教育は教育方法学上の研究課題ともなっており、サイエンスと言い換えることもできるのである。

農家や農業科支援員の方々は漠然と会津の自然と向き合い農を営んでいるのではない。日本の財産とも言える会津で編まれた『農書』の内容を引き継いだ喜多方の農家の農業の知識、技術もまた人類の財産である。あらゆる知恵が、心の有り様を含めて喜多方で発揮されている。農業技術だけではなくちろんない。「暮らし」の技術も芸術的レベルにあり、そのことが日本中で「喜多方の民宿で泊まってみたい」「グリーンツーリズムに行き

たい」と引きつけられる理由でもあるのだ。それを基盤として「農業科」が実践されていることを改めて確認しておきたい。

4 日本農業賞大賞と子どもたちの笑顔

本賞の受賞はフクシマに喜びと希望を与えている。そればかりではない。全国で食農教育、「めぐりスクール」に取り組んでいる農業者やJA、行政に大きな朗報となった。喜多方の学習と受賞は「いのち」の在り方に真摯と向き合っている全国の人々が共有する喜びなのである。「喜」が「多」い「方」とは、偶然のネーミングではない。

人類史に残るようなシビア・アクションの現実を生きている我々である。このことから目を背けてはいけない。そして、だからこそ「いのちは宝」（沖縄ではよく使われる。能登半島では「子どもは宝やさけ」と慈しむ。）なのである。無数のいのちに正面から向き合うことによって、我々はこの問題を克服していく知恵を獲得できるだろう。「小学校農業科」が喜多方で行われていることは、日本中に勇気と希望を与えているのだ。喜多方の子どもたちの笑顔が日本の未来に光を与える。

したがって、日本農業賞大賞は単なる農業コンクールの受賞という意味にとどまるものではない。一人ひとりの子どものいのちや輝きを大切にし、地域と農の誇りを語り、共有し、次世代につなぎ、「美しい日本」であり続けたいという願いが凝縮されたヒューマニズムの賛歌である。

最後に、本作文集を編集するに当たって協力してくれた研究室の学生たちについて触れておきたい。子どもたちの作文を読むこと自体が学生にとって重要な学習体験である。特に教職を目指す学生にとっては貴重な場を喜多方市からいただいたと考えている。喜多方市の皆さんに感謝申し上げます。

また、紙上を借りて以下の学生たちに感謝の意を表したい。

（ ）内は出身県

引地 リサ（宮城）、浅野 梨華（宮城）、岩渕 莉奈（宮城）、遠藤 宣子（福島）、鈴木 みちる（秋田）、榎本 愛美（福島）、大久 恵未（宮城）

平成二十五年二月

平成 24 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	岡村 三夫
喜多方市PTA連絡協議会長	渡部 善和
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長	宗像 宏行
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主査	奥谷 陽之助
会津いいで農業協同組合営農部長	鈴木 幸男
喜多方市小学校農業科支援員	山田 義人
農業体験受入農家・喜多方市農業委員会委員	伊藤 幸太郎
喜多方市産業部農林課長	佐藤 健志
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	藤田 信一

【特別審査員】

宮城学院女子大学学芸学部教授	佐藤 幸也
喜多方市教育員会教育長	菅井 一良

※この作品集は宮城学院女子大学佐藤研究室の全面的な協力により編集・発行することができました。心から感謝を申し上げます。

編集後記

小学校農業科は喜多方市の特色ある取り組みであり、毎年多くの方々の視察があります。そこで「農業科の成果は？」とよく問われますが、それは何らかの数値で示されるものではありません。そこで、学習に笑顔で取り組む子どもたちの様子をスライド等でご覧いただくとともに、この作文集をお読みいただいています。子どもたちは、限られたスペースの中で農業科の学習を通して感じたこと、学んだこと、考えたことを自分の言葉で表現しています。様々な体験をしたからこそ、輝く言葉が次々とわき出てくるのでしょう。すばらしい！ 本当にすばらしい！ この作文集を読むだけで、農業科の取り組みの成果が実感できます。今後も、農業科を通して子どもたちが成長していくことを願っています。（指導主事 藤田 信一）

小学校農業科に携わり早5年、ようやく見えてきたのが小学校教育に農業科が必要であるということだ。利己主義、利便至上主義、学歴(力)偏重等々世知辛い社会情勢にあって、人間が幸せに生きるために必要なことは「自分が様々なつながりの中にあって生かされている」「生き物らしく人間として生きる」ということなのだと思う。そして、それが実感できるのは「農業科」であり、先日お会いした中村桂子先生が農業科を提唱された想いである。作物が刻む命の時間、家族や地域の方とのつながり、思い通りにならない自然との共生、自分は生き物で自然の一部、そんなことを理解しはじめていた喜多方の子ども達を誇りに思い大きな期待を寄せたい。10年後、20年後、君達、そして喜多方が輝いていたならばきっと「農業科」の効果なのだと思います。（担当主査 渡部 通）

中村桂子先生をおもてなしするため、加納小学校に大根をお裾分けしてもらおうと訪問した時のこと。子どもたちは、収穫した大根を洗っているところでした。初冬の寒空の下、手袋をしていても水の冷たさをごまかすことは出来ません。「冷たくないの？」と尋ねると、「すごく冷たい」といって、そっと差し出した小さな手のひらは紅葉のように真っ赤でした。子どもたちが、農作業の厳しい部分もしっかりと学んでいることを知りました。みんなの作文には、自然、家族や仲間への感謝が溢れています。作物のつながりの中に、自分の命のつながりを発見したのでしょう。支援員さん、先生方が懸命に蒔いてくださった「生きる力」という種は、みんなの「心の畑」にちゃんと根を下ろしているんだなと感じました。（担当職員 只浦 妙子）

平成 24 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 25 年 2 月 発行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

